資料５－１

平成２９年度　第２回国営事業評価技術検討会

国営土地改良事業　事後評価

現地調査概要

平成２９年7月１１日

北海道開発局農業水産部

平成 29 年度 事後評価「小清水地区」国営事業評価技術検討会
現地調査概要

日 時：平成 29 年６月 13 日（火） 14:00～16:00
出席者：
（技術検討会） 長澤委員長、岡村委員、紺野委員、中原委員、波多野委員、森委員
（地元関係団体等）農業者、斜里町、清里町、小清水町、斜里町農業協同組合
清里町農業協同組合、小清水町農業協同組合
（事務局） 北海道開発局
概 要：
【現 地】ダム、頭首工、分水施設、地区内圃場、直売所

【意見交換会】
委員から、事業に対する効果、要望、期待等に関する質問があり、参加団体から以下の回答や意見、状況説明等や委員から評価に関する意見があった。

・区画整理と農地造成によって経営面積は増えたが、ほ場数は減少し、大型作業機械の導入が進んだ結果、作業効率は３割程度向上した。

・小清水町では春期の強風による風食に悩まされており、土の飛散を何とか防止したいと考え、畑地かんがい施設の整備を要望した。
20～30 年前と比べて耕地防風林が減少しているが、土づくりに取り組むことで保水性が良くなり、少々の風では土が飛散しなくなった。

・畑地かんがい施設の整備前は、ほ場までの水の運搬に１人、ほ場での防除作業に１人と、作業員２人必要だったが、現在では、一連の防除作業を１人で出来るようになり、農作業を手伝う家族の負担が軽減された。

・てんさいは、かん水することで干害にあった時に比べると収量は２倍程度違い、効果は大きい。
現在は、経営面積が増え、事業地区外の飛び地でも耕作しており、将来的には飛び地でも水が使えるようになればありがたい。

・近年、清里町では畑作３品に加えて野菜類の作付が拡大しており、野菜類へのかん水意欲は高い。実際に野菜にかん水している農家は、かんがい用水の利用によって収量や所得の向上につなげている。

・にんじんへのかん水が容易になったことで早出し栽培が可能になるなど、根菜類を中心に野菜の安定生産につながった。
　農家は、畑作３品の作業の簡略化、省力化ができたことで野菜生産に手が回るようになり、野菜に対する作付意欲の向上に結びついている。

・事業実施前は、ばれいしょの作付比率が高く、土壌中のｐＨは低い傾向にあったが、現在は輪作体系が確立しており、それぞれの作物に適したｐＨ管理を工夫するなど土づくりに熱心に取り組んでいる。

・GPS を導入して２年程度であるが、作業のロスが２㎝であり、ほ場作業の効率化に効果を発揮している。
　近隣町にまたがって飛び地で耕作しているため、３町まとまって主要箇所に基地局が設置されるとありがたい。

・中央管理所の用水管理システムで全ファームポンド、頭首工、ダムの水位等を一元管理しているが、５年～10 年でコンピューターの機器の更新が必要である。

・緑ダムの上流では新しい環境が出来たと思われるので、ダム湖が出来たことによって、どういった魚が生息しているか記録として残して欲しい。

以上

平成 29 年度 事後評価「斜網西部地区」国営事業評価技術検討会
現地調査概要

日 時：平成 29 年６月 13 日（火） 14:00～16:00
出席者：
（技術検討会）　長澤委員長、岡村委員、紺野委員、中原委員、波多野委員、森委員
（地元関係団体等）農業者、網走市、小清水町、オホーツク網走農業協同組合
小清水町農業協同組合
（事務局）　北海道開発局
概 要：
【現 地】ダム、頭首工、分水施設、地区内圃場

【意見交換会】
委員から、事業に対する効果、要望、期待等に関する質問があり、参加団体から以下の回答や意見、状況説明等や委員から評価に関する意見があった。

・事業実施前は 20m 先も見えないほどの風食があったが、施設整備後はかん水によって土の飛散を防ぐことが出来た。
現状では防風林がほとんど伐採されたにも関わらず、その当時ほど表土が飛散しなくなった。
堆肥を投入するなど計画的に土づくりをすることで風害に強くなっている。

・国営事業に限ったことではないが、谷地にある農地では、ほ場暗渠の排水先となる明渠が設置できないので、暗渠の効果が発揮されないとして事業で暗渠の整備が出来ない。
試行した結果、溜となる土地を確保して水が吐ければ、明渠排水路が無くとも暗渠が機能することを実証しており、ほ場状況に応じて柔軟な整備が図られることを期待する。

・ほ場給水栓の一部では、さびが出るようになり、ろ過器の網を２年に１度くらいの頻度で交換している。

・JA と網走市が協力してカナダへのながいもの輸出に取り組んでいる。本事業の実施によって、労働の省力化が図られ、ながいも生産に手が回るようになっている。

・機械の大型化、GPS による自動操舵の効果をより発揮させるためには、平らで大きなほ場が適しているため、現在道営事業でほ場整備を行っている。

以上

平成 29 年度 事後評価「斜里地区・斜里（二期）地区」国営事業評価技術検討会
現地調査概要

日 時：平成 29 年６月 13 日（火） 14:00～16:00
出席者：
（技術検討会）　　長澤委員長、岡村委員、紺野委員、中原委員、波多野委員、森委員
（地元関係団体等）農業者、斜里町、斜里町農業協同組合
（事務局）　　北海道開発局
概 要：
【現 地】ダム、頭首工、分水施設、にんじん集出荷施設

【意見交換会】
　委員から、事業に対する効果、要望、期待等に関する質問があり、参加団体から以下の回答や意見、状況説明等や委員から評価に関する意見があった。

・低平地の泥炭農地では、排水改良により大型機械による作業が可能になった。

・丸山に造成した農地は、周りから完全に隔離されており、農協の種いも団地として活用されている。

・戸あたり経営面積は増えたが、農家個人で手が回らない分は農協のコントラが請け負うようにしたことで、野菜生産は拡大している。
　にんじんのブランド化が、野菜産地としての知名度を高め、にんじんの販売ルート・市場を足がかりにキャベツや白菜など他の野菜の販路が確保出来たことも野菜生産拡大に寄与している。

・にんじんなど野菜類は発芽を揃えるためにかん水することが非常に重要である。
　畑地かんがい施設の整備前は、畑を耕し、土の水分が無くならない翌日のうちに種を蒔くというスケジュールで作業しなければならなかったが、整備後は余裕を持って作業を行えるようになった。

・畑地かんがい施設の整備を不要だと判断した山沿いの地域の農家は、用水確保に苦慮しており、今では整備したいという声が上がっている。

・農家戸数の減少により草刈りなど排水路の維持管理が大変になってきている。

以上